

令和元年6月21日現在

機関番号：14303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16660

研究課題名(和文) やまと絵の場と機能をめぐる受容美学的研究

研究課題名(英文) A Reception Study on Yamato-e: Its Audience and Function

研究代表者

井戸 美里 (IDO, MISATO)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・講師

研究者番号：90704510

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：「唐絵」の概念として成立した「やまと絵」について、遺品の多く残る室町時代の屏風絵を中心にその受容者や受容の場について研究を行ってきた。本研究では文学作品や同時代史料を参照しながら屏風絵の受容された場について考察を行い、平安時代以来、和歌に取材する歌枕や景物を描くやまと絵の特質は室町時代においても継承されていること、それらの屏風絵の主題は、宮廷を中心に歌枕のイメージが固定化していく過程のなかで制作されていった可能性があったこと、屏風絵に組み込まれた和歌のテキストは、それらの屏風が受容された空間において読み解かれ新たな和歌を生む可能性もあったこと、を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

水墨画が興盛していた室町時代において、やまと絵屏風の遺品が少なからず見出されその重要性が指摘されて久しいが、これまでの研究は筆者や様式などを考察するものが多く、その機能や受容の場をめぐっては不明な点が多かった。本研究の意義は、そのような室町時代以降の屏風絵の主題の背景に和歌のテキストが介在していたこと、特に、公家や武家、僧侶らによって繰り返し詠まれ共有されてきた歌枕のイメージの蓄積があったことを指摘した。実景表現とは異なる、過去から継承されてきた和歌のテキストの蓄積を表象するスクリーンとして、さらにそこから新たな言葉の世界を導くというやまと絵屏風の機能の一面を示すことができたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：As Yamato-e (Japanese-style painting) originally emerged as a counterpart of kara-e (Chinese-style painting), it should be noted that there remain quite a few examples of Yamato-e folding screens in Muromachi period. This research specifically focused on the audiences. By examining the extant examples of Yamato-e screen paintings from this era, I argued that the iconography of these later screen paintings was rooted in those of Heian period because they also had a close connection with waka poems. I also suggested that such screen paintings that had poetic connotations could have been executed in the court where the poetical images such as utamakura were repeatedly recited through plethora of poetry matches. Finally, I clarified the function of Yamato-e screen paintings as media that enable the audiences who shared artistic pursuits to interpret the textual connotation and also produce new poetical imagination evoked by the painted image which had reflected layers of textual sources.

研究分野：人文学

キーワード：屏風 和歌 やまと絵 屏風歌 名所 庭園

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究で対象とする「やまと絵」は、「唐絵」の対概念として、日本的な主題を描く作品であり、和歌の世界とも関わりながら数多くの屏風絵を生み出してきたことが文献上は明らかであるものの、現存しているのはほとんど室町時代以降の作品である。水墨画が盛行していた室町時代において、次々に発見されているやまと絵屏風の現存作例は先行研究においても注目されてきたが、未だどのようなジャンルや画題の作品が、どのような空間で使用され、どのような役割と機能を持っていたのかという考察は十分に行われてきているとは言えない。こうした感心から、科研費補助金のスタート支援「屏風絵と儀礼に関する空間的研究 東アジア的視点から」(-2014)においては、米国に所蔵される多くの屏風絵のコレクションの調査を行ってきた。東アジア文化圏に共通する絵画の主題(たとえば、儒教的な主題や花鳥などのモチーフ)がいかに広く普及しており、日本においてはその影響を受けつつも、いかにやまと絵として変容を遂げたのか、ということを追及した。こうしたなかで、日本的な主題を描くやまと絵の作例について、特に受容者や受容の場を考察するとともに、絵画の主題やモチーフが受容空間である行事や儀礼の場においていかに機能していたのかを分析する必要性を認識した。

### 2. 研究の目的

本研究では、大画面の「やまと絵」が成立した中世初期の時代から国家的な歴史画を描いていくことになる「日本画」に至るまで、「日本的なるもの」として受容されてきた美術作品について、その享受された場や機能について再検討してきた。特に、中国や朝鮮(あるいは、西洋)に起源を持ちながらも、変容を遂げて日本的な風土に根付いていく過程について、享受者や享受の場との関わりという視点から見直すことが本研究の目的である。特に障壁画に焦点を当て、西欧のタブローとは異なる形態を持つ東アジアに特徴的な大画面の絵画作品が、それぞれの建築空間においてどのような機能を担っていたのか、ということを行行事や儀礼の空間の特質とともに明らかにすることを旨とした。本研究は科研費補助金「国際共同研究強化」(2016-2018)と並行して行う研究である。

### 3. 研究の方法

やまと絵や日本画など、日本的な美術がどのように成立し、どのように享受されたのか、ということ明らかにするために、美術自体の様式や描かれた主題・モチーフを東アジア的な文脈のなかに据えて考えることに加え、美術史、歴史、芸能史、文学、美学、建築史など既存の分野間を越えた領域横断的な視点から、つまりそれらが置かれた「場」や儀礼との関わりのなかから総合的な分析を行ってきた。そのためには、やまと絵屏風に関する技法や様式に関する美術史的な分析に加え、屏風の制作や使用された場、さらには行事や儀礼について記した同時代の文書や文学作品の記述の精読、和歌・漢詩・謡曲・幸若舞曲などの文学や芸能のテキストに至るまで、対象となるやまと絵屏風が成立した同時代の幅広い文献を博搜したうえで分析を行ってきた。

### 4. 研究成果

#### 1) 名所絵としての「吉野図屏風」について

「吉野図」については、山辺一面に咲き誇る山桜が風に吹かれては散る幻想的な景観を描く一連の作例について考察を行った。現在所蔵が知られているサントリー美術館、ウェーバー・コレクション、春日大社に所蔵される「吉野図屏風」の三作品は先行研究によって構図や図像に共通性が見られることが指摘されているが、現在知られている三作品に加え、米国で調査を行った結果、二つの作品(Erik Thomsen 所蔵、クリスティーズで取引された作品)を新たに見出すことができたため、それらを加えた計五点の同様の構図を持つ「吉野図」について比較を行った。その結果、桜のほかに取り込まれた滝や岩などの図像には、吉野にまつわる『万葉集』などに収録される古代天皇の行幸の際に詠われた古歌がふまえられており、「名所絵」としての「吉野図」には天皇家の離宮としての宮瀧のイメージが重ね合わされている可能性を指摘した(2017年3月18日美術史学会例会にて口頭発表)。

#### 2) 歌枕の絵画化について

歌枕を描くやまと絵屏風については、平安時代に遡る現存作品は見いだせないが、文献上明らかになるだけでもおびただしい数の存在が確認できる。一方で、このような歌枕との関わりについては室町時代以降のやまと絵屏風においてどれほど継承されていったのか、という点は依然として不明な点が多い。このようななか、上記の「吉野図屏風」を端緒として、そこに描かれた風景にはある一定の歌枕のイメージが見出せることを指摘した。もともと内裏に由来していたことが明らかな「吉野図屏風」には、宮廷において頻繁に行われてきた歌会などを通して継承され固定化されてきた歌枕の世界が表象されていたことを論じた(2018年12月にシンポジウム「和漢の故事人物と自然表象」において口頭発表)。

また、室町後期から桃山時代の大画面やまと絵障壁画における歌枕としての「名所」の変容について、京都の洛外を中心に描いた「洛外図」について、当時流行していた和歌や歌謡との関わりから研究を行った。17世紀半ばに描かれた京都の郊外を高い視線から俯瞰的に描く「洛

外図」について、政治的かつ経済的な中心地としての洛中ではなく、古くから天皇家と関わりの深い洛外の地が歌枕として描かれるとともに、江戸初期に刊行された地誌や「名所記」に書き込まれた場所と一致することを指摘した(2017年1月に東京大学東洋文化研究所での国際シンポジウムにおいて口頭発表)。

## 2) 絵画、庭園、和歌の関わりについて

室町時代のやまと絵屏風、特に自然の風景を描く四季絵について、描かれた主題やモチーフ分析を通して、そこには古くから詠まれた和歌や漢詩などの言葉が内包されており、室町時代のやまと絵屏風に平安時代の屏風歌の伝統が濃厚に受け継がれている可能性について指摘した(英国のセインズベリー日本文化芸術研究所における国際シンポジウム Display as Ensemble における口頭発表 "Depicting Nature: Screen Paintings for Meeting Hall" 2018年5月)。さらに、やまと絵屏風の受容空間について、庭園の存在の重要性について確認した。「四季花鳥図屏風」(サントリー美術館蔵)や「浜松図屏風」などに描かれるモチーフは現実の庭園の前栽の植生と一致すると言われてきたが、平安時代より詠い継がれてきた和歌や漢詩の言葉は庭園の前栽の風景を彷彿とさせるものである。実際に、室町時代に入ってから庭園を目の前に和歌会などが行われてきた実態を確認するとともに、庭園の風景を写したかのようなやまと絵屏風の存在は、単に実景の再現ではなく、和歌の言葉を紡ぎ出すためのスクリーンとしても機能していた可能性を指摘した。これらの研究成果については、昨年度までに行ってきた二回の国際シンポジウムをもとに『東アジアの庭園表象と建築・美術』(昭和堂、2019年)として編集し、「共鳴する庭園と絵画」と題して論文を収録した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- (1) 井戸美里「「歴史画」における有職故実と図案教育—高伝来の「歴史画」をめぐる—」『五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要』25号、13-40頁、2018年11月〔査読有り〕
- (2) IDO Misato, The Space and Liminality of Folding Screens: Iconography of the Sea and Pine Tree, *Studies in Japanese Literature and Culture*, pp.63-77, 2018〔査読有り〕
- (3) 井戸美里「歴史画の誕生—歴史教育のための一高絵画—」横須賀美術館特別展図録『集え！英雄豪傑たち—浮世絵、近代日本画にみるヒーローたち』6-11頁、2018年4月
- (4) 井戸美里「「東洋画」としての花鳥図—十九-二十世紀初頭の朝鮮の宮廷における日本人画家の活動を通して—」『東洋文化研究所紀要』第173冊、25-69頁、東京大学東洋文化研究所、2018年3月〔査読有り〕
- (5) IDO Misato, Visualizing National History in Meiji Japan: The Komaba Museum Collection, *University of Tokyo, Aesthetics, The Japanese Society for Aesthetics*, pp.15-25, 2016〔査読有り〕
- (6) 井戸美里「幸若舞曲の絵画化と受容空間に関する一考察—『曾我物語図屏風』を例として—」『美学』247号、73-84頁、2015年〔査読有り〕

〔学会発表〕(計18件)

- (1) 井戸美里「再生される名所絵—障壁画に投影される和歌—」シンポジウム「和漢の故事人物と自然表象」東京大学東洋文化研究所、2018年12月24日〔招待〕
- (2) IDO Misato, Reproducing and Representing Meisho: Embedded Memories in the Screen Painting of Mt. Yoshino, *Reconceptualizing Meisho: Topography, Memory, and Representation* (October 30, 2018)
- (3) IDO Misato, Garden and Screen Paintings: Envisioning a Landscape of Waka Poems, *Kanmon nikki translation workshop III*, Heidelberg University (September 16, 2018)
- (4) 井戸美里「名所絵と障壁画—和歌を喚起する風景—」国際シンポジウム「名所について再考する—都市・建築・美術の磁場としての日本風景論」京都工芸繊維大学、2018年7月20日
- (5) IDO Misato, Depicting Nature: Screen Paintings for Meeting Hall, *Display as Ensemble*, Sainsbury Institute for the Studies of Japanese Arts and Cultures, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures (June 15, 2018)〔招待〕
- (6) 井戸美里「歴史画としての一高絵画」東京大学駒場博物館所蔵第一高等学校絵画資料修復記念—知られざる明治期日本画と「一高」の倫理・歴史教育—記念シンポジウム、東京大学、2017年12月2日
- (7) IDO Misato, 'Discovering "Oriental Painting": Adaptation and Reformation of Bird-and-Flower Paintings in 1890-1920' Ohio State University, 2017年9月8日〔招待〕
- (8) IDO Misato, Wall Painting and Court Spaces: Japanese Painters in the Early 20th Century Seoul, *Contextualizing Gardens and Painting in East Asia II*, 2017年6月5日
- (9) 井戸美里「「吉野図屏風」の景観描写に関する一試論—桜に滝 谷川 岩の図像学—」美術史学会西支部例会、京都工芸繊維大学、2017年3月18日〔査読有り〕

(10) IDO Misato, Visualizing the Capital: Kyoto as Meisho 名所 in Premodern Japan, Asian Cities: Hubs of Interaction, Tradition and Transformation, University of Tokyo (January 11, 2017)

(11) IDO Misato, "Reinventing National Heroes in the 1890s: Portraits of the Southern Court as a Paragon of Fidelity," European Association for Asian Studies (EAJS) Conference, Lisbon 2017 年 9 月 2 日〔査読有り〕

(12) IDO Misato, Beyond Style: Circulation and Transformation of the 'Bird-and-Flower Painting' in East Asia, Global Circulations and Transformations: Art and Textile in East Asia 1540-1760, 2017 年 7 月 26 日

(13) 井戸美里『『看聞日記』の室礼：屏風絵と儀式のための空間』ハイデルベルク大学(2016年10月7日)

(14) IDO Misato, Paintings as Gardens: Everlasting Pines on Golden Sands, Contextualizing Gardens and Painting in East Asia, Kyoto Institute of Technology (July 6, 2016)

(15) 井戸美里「東京大学駒場博物館所蔵の一高絵画資料の概要 一高伝来の「歴史画」について」松本市立旧制高等学校記念館、2016年8月28日

(16) IDO Misato, Imagining the "Capital": Paintings and Ballads of Kyoto in the Realm of a Feudal Lord, Association for Asian Studies, Asia Annual Meeting, Kyoto (June 25, 2016)〔査読有り〕

(17) 井戸美里「屏風の空間と境界性 花木・花鳥のイコノロジー」(国際共同研究「境界をめぐる文学」)国文学研究資料館、2016年1月9日

(18) IDO Misato, Transcending Bird-and-Flower: An Iconological Study on Gilded Screen Paintings of Pine Trees and Birds, Symposium on Is East Asian Art History Possible?, SOAS, University of London (October 9, 2015)

〔図書〕(計2件)

(1) 井戸美里『戦国期風俗図の文化史』吉川弘文館、2017年、全372頁

(2) 井戸美里編『東アジアの庭園表象と建築・美術』〔編著〕昭和堂(KYOTO Design Lab Library 2)2019年、全227頁(序:i-vii頁およびChapter 4: 72-104頁)

## 6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。